

## 《福島復興の絵姿を考える》

小須田 紘一

エネルギー基本計画とかかわる福島復興の絵姿はどのようなものが描けるだろうか？

### 第五次エネルギー基本計画の策定

2017年4月、原子力委員会から【原子力利用に関する基本的考え方】が示されました。続く2018年にかけては、第五次エネルギー基本計画の策定と日米原子力協定の継続協議が予想される時期となっています。

基本計画は日常生活の基盤の一つであるエネルギーの安全保障策ということでもあり、安定エネルギーの「・ある・なし・その規模」は、科学技術と不可分である現在の生活ばかりでなく、将来の生活をも左右するので、多大な関心を持っています。

### 原子力エネルギーが担う役割

このような状況にあって、原子力エネルギーは、電源構成の中でベースロード電源として位置づけられています。

しかしながら、オイルショック・リーマンショックを乗り越えた経験に鑑みれば、震災後の原子力エネルギーのミニマイズ論 (as low as possible) は、既に電力料金の高額化をもたらし、更には、基礎体力ともいべきベースロード電源そのものの脆弱化につながる可能性を否定できず、望まれる方向とは思えません。

atoms for peace を理念とする原子力基本法に則り、震災後に安全対策を講じた原子力発電所については、S+3E\*に照らし合わせて、再稼働を速やかに進展させ、脆弱化の恐れから脱却すべきです。それは人的・経済的にも福島復興に寄与できることになると考えられるからです。

[\* S+3E : 安全性 (Safety) 、安定供給 (Energy Security) 、経済効率性の向上 (Economic Efficiency) 、環境への適合 (Environment) ]

### 福島復興の絵姿

基本計画と切り離せない原子力エネルギーと、密接に関わってきた福島の復興を進めるにあたっては、放射性物質の取扱い知識が不可欠です。しかしながらそれを担う人材は、必ずしも原子力のOBや経験者、放射線に理解の深い現役ばかりとは限りませ

ん。若い人、新しい人の参加もあることでしょう。現場のエキスパートが定年退職することによって、設備の詳しい様子が不明になる状況の発生も考えられます。

復興に携わる人材には、前向きな意識で取り組める環境づくりとともに、放射性物質の・使用・貯蔵・保管・廃棄、および原子力発電について、蓄積されてきた知識や技術、管理等が引き継がれていく必要があります。

そのためには【廃止措置・除染物中間貯蔵・健全な原発が共存する福島復興の絵姿】は、合理的な選択肢として有り得るのではないか、と思考します。